

新日本出版社



かもしか文庫 6



自然・文学・人間

W・H・ハドソンの出発

寿岳文章

■編集委員

古在由重 寿岳文章 遠山啓 真下信一 菅忠道

自然・文字・人間

W・H・ハドソンの出発

寿岳文章

新日本出版社

930.27 寿 岳 文 章

自 然・文 学・人 間

新日本出版社 1973

246p 18.9cm (かもしか文庫6)

著者略歴

寿岳文章 (じゅがく・ぶんしょう)

1900年生まれ。京都大学文学部卒業。文学博士。
龍谷大学・関西学院大学・甲南大学などの教授
を歴任して1969年退職、以来著述に従事。

主な著書 『河上肇博士のこと』(弘文堂), 『英
文学の風土』(大修館書店), 『書物の世界』
(朝日新聞社), 『日本の紙』(吉川弘文館),
『本と英文学』(研究社), 『寿岳文章・しづ
著作集』全6巻(春秋社)。

自然・文学・人間

—W・H・ハドソンの出発—

かもしか文庫6

1973年6月20日 初版

著 者 寿 岳 文 章

発 行 者 松 宮 龍 起

郵便番号102 東京都千代田区富士見2-13-14

発 行 所 株式会社 新日本出版社

電話 東京(265)7006(営業)

(265)2075(編集)

振替番号 東京13681

印刷所 光陽印刷株式会社

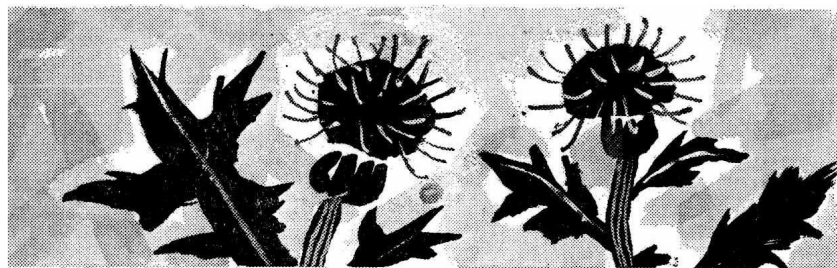
製本所 古賀製本株式会社

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします

自然・文学・人間

— W・H・ハドソンの出発 —





目次

はじめに——自然を愛するということ……………5

一 老犬の死……………29

〈この章と私〉 死と少年……………48

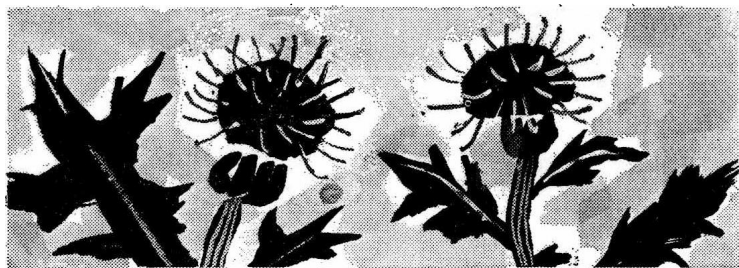
二 植込み……………61

〈この章と私〉 鳥を見つめる少年……………85

三 平原の風光……………93



	〈この章と私〉 大自然の力	112
四	初めて見たブエノス・アイレス	119
	〈この章と私〉 ふしぎなものを見る	142
五	ヘビと子ども	157
	〈この章と私〉 すべてのいのちあるものへの愛	170
六	ヘビの神秘	175
	〈この章と私〉 少年のアニミズム	189
七	少年時代終わる	197



〈この章と私〉 世界観、人生観をもちはじめるとき……………220

おわりに——自叙伝と私……………229

あとがき……………237

索引 ①書名・作品名 ②人名 ③動物 ④植物)……………(巻末)

装丁 伊藤 忠彦

カット 小島 和夫

表紙絵 桃の花とオナガコオウム

〔はるかな国とおい昔〕原書より〕

はじめに

—自然を愛するということ—

▼ 尾瀬のミズバショウ(提供・新婦人しんぶん)



◀ ベトナムの民族舞踊「竹おどり」

(提供・JPS)

国破れて 山河在り

城春にして 草木深し

時に感じては 花にも涙をそそぎ

別れを恨んでは 鳥にも心を驚かす

これは、誠実に生きぬくことを自分の何よりの信念とした、中国唐代の大詩人杜甫が、四十
六才の春、反乱軍の占領下にあった長安の都で作った詩の前半です。いくさやぶれ、国都は賊
のお手におちてしまったけれど、山や河の自然は、もとのままちゃんと残っており、春の季節の
おとずれた都城には、草木の緑が濃い。平和のなくなった世のありさまが悲しく、無心に咲き
ほこる花を見ても涙がこぼれ、ちりちりになった一族に思いをはせては、樂しげに鳴く鳥の声
を聞いても心はいたむ。——人の世に生きているかぎり、人は人にたいして誠実であらねばな
らぬとする、ヒューマニズムの詩人杜甫は、敗戦の春を迎えて、自分の気持ちをこううたいま
した。

人の手をつくった国都は破壊されても、自然のいとなみである山や河は厳存する。——時代
はかわって現代の話になりますが、史上最大の規模といわれるB52の集中じゅうたん爆撃を、



残忍非道なアメリカ政府によって加えられ、自然の地形までかわるという、想像を絶する国土の破壊、人民皆殺しの攻撃をうけながら、ねばり強く抵抗し、ついにアメリカを屈伏させ、民族の自主独立の立場をかがやかしく貫きとおしたベトナム民主共和国の兄弟たちも、勝利者として、いためつけられたとはいえ、目の前にのこった山河や自然の意味の深さを、いま感慨深く思いかえしているのではないでしょうか。

一九六九年九月、抗米救国闘争のさなかに、七十九才の生涯を終えたベトナム民主共和国主席ホー・チ・ミンは、死の四カ月前、「人生七十古来稀なり」という杜甫のことばを引用して、私も「稀な」人びとの仲間にはいり、健康もややおとろえたので、ここに若干のことを書き残しておくとして、遺書をしたためましたが、その中で、つぎのようにベトナム人民に語りかけています。

「……アメリカの侵略にたいする抵抗戦争は長びくかもしれない。わが同胞たちは、人命、財産の面で新たな犠牲を払わ

なければならぬかもしれない。いずれにせよ、われわれは完全な勝利の日まで、米侵略者とたたかう決意でなければならぬ。わが山河、わが人民は滅びない。アメリカに打ち勝つたら、十倍も美しい祖国を建設しよう。前途にいかなる困難や辛苦が待っていようとも、わが人民は、必ずや完全な勝利をかちとることができよう。アメリカ帝国主義者は、撤退しなければならぬだろう。わが祖国は、再統一されるだろう。北と南のわが同胞たちは同じ屋根の下に再結合されるだろう……」

一九七三年二月、「ベトナム協定」成立直後、季節の花を飾って、長い長い苦難のあとにおとずれた平和の旧正月をよろこびあう北ベトナム人民の顔が、テレビの画面にうつったとき、まず第一に私の感じとつたのは、祖国の大地をこよなく愛し、衣食住の最後のよりどころを、いつも大地にもとめていたらしいその国の人たちの、質素ではあるが賢い選択についてでした。すべてを物量とコンピューターに托したアメリカ、しかし、根本において自然の道理にそむき、社会の正義、人民のねがいをふみにじろうとしたアメリカは負け、自然と自然の道理をたいせつにしたベトナム人民は勝ったのです。

ところで、自然と自然の道理をたいせつにするとは、どういうことでしょうか。その答えをひき出す鍵は、いまさき引用したホー・チ・ミンおじさんの遺書の中の、「わが山河、わが人民は滅びない。アメリカに打ち勝つたら、十倍も美しい祖国を建設しよう」という言葉の中に見

出されます。今のより十倍も美しいものにしよう、ホーおじさんのいう祖国の二本柱は、山河、つまり自然と、人民なのです。歴史時代にはいつてからの人間の歩みのあとをふりかえってみますと、人間が自然を敵として戦うのではなく、自然の道理をよく見きわめ、その法則に順応して、自然と人間のあいだに、節度のある信頼関係をうち立てるのに成功したとき、文明の花は咲き、人間に幸福がおとずれました。もちろん、人間のつくる文明は、人間をつつみこんでいる大きな自然の中で開花するのですから、自然の道理は、自然界だけのものではなく、その中に住む人間にとつても、そのまま通用する同じ道理なのです。たとえば、人間は生まれながら平等なのに、人種や、性別や、身分で差別の厚い壁をつくったり、富や力を一部に偏在させたりするのは、自然の道理のはなはだしい踏みにじりです。だから、自然の道理にしたがつて、この大地、この地球をたいせつにするというのなら、同時にそれは、大地の上に住む多くの人民を、国籍や人種にかかわりなく、たいせつにするということできなければなりません。自然と人間とのあいだにうち立てられた信頼関係のバランスがくずれずに、人民の幸福が増幅してゆく状態、それを私はほんとうの文明と呼びたい。ボタン一つ押せば、数千キロのあなたに住む何千万もの人のいのちが、たちまち亡ぼされる兵器の開発は、どんなに高い水準の技術を誇るにもせよ、文明とはまったく反対の、野蠻やばんのきわみであることを、私たちの心に、ひと深くきざんでおきましょう。

私は、播磨・摂津・丹波の三国が境を接する兵庫県の山村に生まれ、中学へ進むまでの少年時代を、その村ですごしました。農村の暮しに必要な壺や甕や徳利などを、何百年も作りつけ、今もやきものの村として有名な丹波の立杭から、そう遠く離れておりません。中国縦貫高速道路が西にのびようとする最近では、そのあたりの自然環境もずいぶん変わったことと思われませんが、戦争の終わった一九四五年の秋、都会ではきわめて乏しくなった食糧を手に入れるために、山陰線の三田という駅におり立ち、そこから十四キロほどの、故郷の村への山道をゆきかえりした日の印象は、四半世紀あまりをへた現在も、私の網膜にはっきりと映像されたままのようなこちがいたします。

戦時中、掘りおこしてガソリンの代用油を採った松の根が、あちこちにかけているものの、道の周辺に展開する自然の風光は、私の少年時代と少しも変わっていませんでした。国破れて山河はあったのです。さかんな勢いで道の中までも蔓をのばしている葛の葉をふみながら、この自然があるかぎり、いま敗戦のじめさにあえぐ私たちも、きつと立ち直れるだろう。これがそのときの私の、正直な感想でした。

ところが、一九六〇年、池田内閣が成立したところから、急速な経済の高度成長政策がとられ、自然環境がどうなるか、そこに住む住民の生活がどうなるか、などにはおかまいなく、大企業の産業拡大がおし進められました。その結果、どれほど多くの死の川、死の海をつくり、「公

害色の空」をうんだかは、もう、みなさんはご承知でしょう。

スウェーデンの経済評論家ホーカン・ヘドバークは、「まず強力な工業体をつくりだし、なによりも経済成長を優先させた日本人は、いま決算の日を迎えようとしている。それは奇蹟的な経済成長と、目前にせまった自然環境や生活環境の破局だ」と指摘していますが、この本の主題にも直接つながるので、自然環境の目にあまるいまわしい破壊ぶりについて、私の体験から、ひとつの例をお話ししましょう。

すでにひしひしと戦争の暗い影がせまっていましたけれど、一九三六年から三九年まで、私と妻とは冬を中心とする農閑期に、主として障子紙や傘紙を漉く農山村の実態や歴史をしらべするために、日本全国を旅行いたしました。バスはガソリンのかわりに木炭を燃料として走る不便な時代でしたが、紙漉き村へ行きつくまでの道の周辺に展開する自然の美しさは、いつも目にしみて、心にしみ入りました。紙は水質を選びます。きよらかな水の流れがないと、よい紙は漉かれません。江戸時代このかた、高知県の仁淀川流域に製紙が盛んとなったのも、西日本の最高峰である石槌山に源を発し、渓谷美で知られる面河村を過ぎ、高知県側にはいつて剣・鳥形の両山脈を横断し、蛇行に蛇行をかさね、全長一三〇キロにおよぶ長旅の末、土佐湾にそぐこの川の、自然の恩恵があったからです。上流の深い山ふところには、紙を漉く材料となるミツマタやコウゾの木が茂り、なるほど土佐は紙どころだな、と国道三十三号線をゆく旅人に



感じさせたものでした。しかし、いま私の耳にはいつてくる仁淀水系の情報から、四十年前の昔と今を結びつけることはできません。製紙がおとろえた現在、かつて中流や上流で見られたミツマタやコウゾが姿を消したのはやむをえないとしても、明治の末、石丸富太郎によってその美しさを天下に紹介された面河溪が、最近、すっかり様子を变えてしまったというのです。その原因は、面河から石槌の山腹を縫い、土小屋をへて西条市に出る産業・観光道路のスカイラインを、自然保護に情熱をかける有識者たちの抗議にもかかわらず、おろかにもごり押しに作ってしまったからです。こうして、地学・植物学・動物学の天然の博物館といわれてきた面河溪は、むざんな姿となってしまいました——おそらく回復の望みはなく。

傷だらけの日本列島を見るにつけ、こうなるまで放任してきた為政者の無策無定見に、私は心からの怒りをおぼえます。政治家というからには、中央・地方の区別なく、それにふさわしい資格が必要とされるのですが、自然環境の破壊をどこでどう

こわされゆく面河溪、手前の木きは立
ったまま枯れている (撮影・英伸三)

くいとめるかが全地球的な問題となつて今日、政治家に求められる最大の資格は、自然と人間のかかわりへの、はっきりした認識に立ち、自然の道理をふみたがえずに人間の将来を明るくものとするためには、どうすればよいかの巨視的な展望です。そうした巨視的な展望が、生命をおびやかすほどはなほだしい乾燥地帯や湿潤地帯に人工の手を加えて、人と自然の共存を可能にした例もあります。しかし、今までは美しい調和が保たれていた自然と人間とのあいだの、正常なギブ・アンド・テイクの関係を破算にし、けつきよく、元も子もなくしてしまふような微視的な開発にたいして、政治家はどれほど用心ぶかくあつても、ありすぎる心配はないのです。ところが、日本の現状を見るに見かねて、自然保護運動の口火をきつたのは、地方自治体の役人ではなく、尾瀬三平峠の道路建設に反対し、時の環境庁長官に尾瀬の自然を守れと直訴した長蔵小屋の主人の平野長靖さんのように、わが住む郷土に深い愛着をもつ人たちの、下からもりあがる、やむにやまれない力でした。為政者に期待がよせられないとしたら、この下からの力を、私たちはたいせつにしなければなりません。

公害問題の国際会議などに出席するため、日本を訪れた外国の学者たちは、みな口をそろえて、日本くらい、かけがえのない自然を食いつぶしている民族はほかにないと断言するのですが、このことに関連して、愛国心についての私の考えをのべておきたいと思ひます。戦後、主権在民の憲法が施行されてから、日本人の愛国心が変質した、減退した、いやなくなった、こ

れではないけない、愛国心をはっきり教えた戦前の教育勅語はよかつたなどと、まことしやかにいう人に、今でもときどき出あいますが、これはとんでもないことです。どこの国でも、愛国心は、時の権力者のつごうのよいようにゆがめられやすく、議会主義が早くから根づいたイギリスでさえ、その例外ではありません。だから、イギリス十八世紀の文人で、私のすきなジョンソン博士は、友人に送った手紙の中で、「愛国心はならず者の最後のかくれみのだ」と、嘖々（か）んではき出すように書きました。私腹を肥やすために金で票数を買収しておきながら、表面は愛国者をよそおう腐りきった政治家たちに、ジョンソン博士はがまんできなかつたでしょう。現在の日本でも、愛国を売りものにする右翼団体の催しに、花輪や祝辞をおくる保守反動政治家たちが、ときどき問題となりますが、それを見聞きするたびに、私は二百年前のこのジョンソン博士のことばを、思い出さずにはおられません。

私の考える本当の愛国心とは、縁あって生まれ育つた国の風土への深い愛着、そしてそこに住む多くの人たち、つまり人民大衆の、その日その日の平安としあわせを願う熱い心であって、絶対に戦争の起爆剤とはならず、まして、自国と他国とのあいだに目に見えぬ垣（かき）を作りがちであつた愛国心の通念とは、全く異質であり、無関係です。かけがえのない地球の陸と海と空の自然、その地球の広い底辺に住む何十億もの人民大衆への、いつも開かれてある心の通い路、それが私の考えている愛国心なのです。日本についていえば、地震国は地震国なりに、太古か